

第 21 回「京都御苑ずきの御近所さん」

御霊神社

宮司 小栗栖 元徳 様



■地元では上御霊さんとして親しまれている御霊神社。「応仁の乱発端の地」とも聞きました。神社の歴史を教えてくださいませんか。

御霊神社の歴史は、平安時代にまで遡ります。お祀りしている御祭神の方々の中でも、一番の方が早良親王さわらしんのうです。

早良親王は光仁天皇のご子息で、桓武天皇の弟君にあたります。桓武天皇の時代、早良親王は皇太子でしたので、ゆくゆくは次期天皇ということだったのですが、桓武天皇には、後に平城天皇へいげいになられる息子さんがおられたので、皇位継承の争いが起こります。早良親王は桓武天皇の一番の腹心である藤原種継を暗殺したという嫌疑をかけられ、長岡京を追い出され淡路島まで流されることになりました。これは冤罪であり、早良親王は身に覚えがないと訴えるために断食をされました。そのため、淡路島にたどり着く前に、淀川河畔、今の島本町（大阪府三島郡）で船に乗るところで息絶えてしまわれたのです。しかし、それでも桓武天皇はお許しにならず、早良親王の亡がらを淡路島に流して向こうで火葬をされました。

その後、都では天変地異や桓武天皇の身内で色々な病気が起きるなど悪いことが続き、早良親王の崇りだとパニック状態になったそうです。親王の名誉を回復し丁重に慰めないとならないということになり、早良親王に「崇道天皇」という天皇の位を与えました。ですが、早良親王はもう亡くなられていますから、歴代の天皇ということではなく追号として天皇位をお受けになったこととなります。

863（貞観5）年5月20日に、早良親王等の御霊を慰めるために神泉苑で行なわれた御霊会が、国家として行なわれた初めての御霊会といわれています。それほどまでに、早良親王の崇りは大きかったということです。全国の立派なお寺や官寺、国分寺に命令が下り、一斉に供養するということがあったそうです。

その頃、この御霊神社は「出雲寺」という名前でした。「御霊」という名称については、鎌倉時代に藤原定家が記した『明月記』に祭りの名前として「御霊」と書かれています。当時は上出雲と下出雲という地があり、上出雲の「御霊堂」という場所で早良親王が供養されたことが、歴史に残っています。神社よりもお寺が先というのも変な話かもしれませんが、現在も境内から掘り出される瓦を調べてみると、大体、平安時代よりも古い白鳳時代くらいにまで遡ります。この辺りには今でも出雲路という地名が残っていることから、元々出雲にいた方々がここへ来て集落を営んでいたことが分かりますし、当時の戸籍も正倉院に残っています。御霊神社には、前身であるお寺から合わせた長い歴史があるので、どんなに古い地図を見てもこの場所は上御霊または御霊神社となっています。

鎌倉時代から「御所の産土神」、「禁裏産土神」として信仰を集めていましたが、江戸時代には、御所も御霊神社の氏子の地域に含まれていたため、昔の上京区と北区を含む、広い地域の氏神さんとして更に親しまれるようになりました。

歴史の舞台としては、御霊神社から応仁の乱が始まったと言われていています。今から550年前になりますが、1467年、御霊神社の境内にある御霊の森というところで、畠山政長という武将が陣を取り、戦いを始めたとされています。

他にも、江戸時代に松尾芭蕉がここで「半日は神を友にや年忘れ」という句を詠まれました。地元の弟子達から、ここで句会を催してくださいとご招待されたのだと思います。

このように、御霊神社には千年以上にわたる長い歴史、由緒があります。

■毎年5月には御霊祭が行われ、立派な神輿3基や牛車などが巡行されます。御霊祭の始まりについて教えていただけますか。

御霊会は早良親王等の御霊を慰めるために神泉苑で行われたものですが、この行事が御霊神社で行われるようになった経緯についてはよく分かりません。御霊神社のお祭りは、平安時代から記録があります。当時の公家の日記の『小右記』には「1015（長和4）年8月15日、今日出雲寺御霊会」という書かれ方をしています。これが私の知る限りでは一番古い記述です。ほかにもいろんな記録がありますが、安土桃山時代の狩野永徳の『洛中洛外図屏風』には2基の御神輿をはじめ賑やかなお祭りの行列の様子が描かれています。

現在、3基あるうちの2基の御神輿は、1594（文禄4）年に後陽成天皇より、また1619（元和5）年に後水尾上皇より御鳳輦をご寄進されたものを神輿にしたものです。それから400年が経ちますが、こまめに修理や修復をしています。

そして3基目は、赤い幕のかけられた神輿ですが明治時代に加わりました。御霊神社の氏子には、他にも色々なお宮さんがあったのですが、明治時代の始め、国の方針で、神社があまりに多いということで小さなお社や神主のいない神社は統合されてしまいました。今の上立売、小川通にある小川公園には、当時「貴船神社」という神社がありましたが、そこも廃絶になり氏神の御霊神社に統合されました。その時に御神輿を預かることになったのです。

応仁の乱では神社も随分と損害を受けたので、御霊祭もその後30年あまり行うことができませんでした。その後復活した御霊祭が、今の祭ということです。

■小栗栖宮司様は、御霊神社のほか、京都御苑内にある白雲神社の宮司も兼務されています。御所の弁天さんとも呼ばれる白雲神社について教えていただけますか。

明治維新が起こり、天皇陛下が東京に行かれ、御所の中に住んでいたお公家さんたちも付いて行ってしまいました。白雲神社は、元々、西園寺家の守護神として邸内に祀られていた神社です。西園寺家が東京に行くとき、家が空っぽになってしまうからと一度ご本尊をお寺に預けられました。その後、地域の方や信者の皆さんが、自分たちで責任を持つから御所の中にお祀りさせてほしいと国に請願し、それが許可されたので、元のおり御所の中でお祀りすることになったのです。白雲さんは一般の方からの崇敬が厚かったので、国への請願が実現したのだと思います。そして白雲神社のある場所が、御霊神社の氏子にあたる場所なので、おそらく「上御霊さんの方でお祀りしてもらおう」ということになったのだと思います。私の曾祖父の代から、白雲神社の宮司を兼務させて頂いています。

■小栗栖さまは先祖代々、御霊神社の神主をされているのですか。

先祖から代々、37代続いています。

神社の由来でお話した早良親王が、お亡くなりになってから崇りが起き、御霊を淡路島から都

にお迎えしなければならないということになりました。そこで臣下のものがお迎えに向かいましたが、海が荒れて渡れないことが2回ほど続きましたので、やはり早良親王のご機嫌を損ねているから、一番親しかった者をお迎えに遣わせようということになりました。そこで親王の甥にあたる五百枝王という方が選ばれました。この方も連座され四国・伊予に流されていたのですが、都に帰し、早良親王のお迎えに遣わせたところ、海も穏やかになり無事に早良親王の御霊を都に戻すことができました。

その後、五百枝王は参議となり復位されたのですが、皇籍・皇族を離れ臣籍降下をしてお仕えしたいと申されたそうです。「春原 五百枝」として王の身分を捨て、御霊神社の初代宮司とされました。その方から代々御霊神社にお仕えしています。私は「小栗栖」という名字ですが、先祖を辿っていくと、元々は「春原」という名字になります。江戸時代のはじめに「小栗栖」に変わったようです。

先祖代々お使いしている長い歴史の中で、御霊神社は神仏両方を兼ねている時もあったようです。また、天台宗・最澄の延暦寺とも関係があり、最澄が遣唐使として唐の国からいろいろなものを持ち帰ってこられた際、都で道場を開く候補地は、比叡山と高雄の神護寺の周辺と御霊神社の三箇所であったと『宇治拾遺物語』に記されています。遣唐使として唐に行った円珍などの偉いお坊さん方が帰ってこられて朝廷へご挨拶に行く時には、まず出雲寺に入り、休息し整えてから朝廷にご挨拶に伺うという習わしだったそうです。当時は「七寺」という、七つの大きなお寺の一つでした。

■以前、小栗栖様から明治天皇が御所を詠まれた和歌について教えていただきました。小栗栖様は、白雲神社で巳の日の早朝参拝式（朝参式）をされていますが、和歌など文化的なものにも興味をお持ちでしょうか。

巳の日の朝参式という行事が、江戸時代からずっと続いています。以前は多くの方が参加されていたようですが、最近では10人くらいです。私もせっかくなので、月に一度の当番の時にはひと言くらいはご挨拶をしようと思い、古今集や明治天皇が詠まれた和歌などの中から、御所に関係した歌を2、3首紹介するというのを現在も続けています。

朝参式にはどなたでも参加することができます。巳の日の朝7時からなので、観光客の方はまだ見えず、朝参りの方や朝の散歩に来られた地元の方が多いです。

■思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか。また、京都御苑で好きな場所、好きな時期などはありますか。

京都御苑には、子どもの頃に時々遊びに行っていました。通りを歩いたり、どんぐりを拾ったり、いろんなことをしていました。御所の堀の縁にずっと水が流れていますが、昔は「御溝水」といって琵琶湖から水を引いていたので、魚がおりました。魚獲りはあまりしませんでした。横を歩いて魚がさあーっと泳ぐのを眺めたり、御所の壁にもたれて足を浸けたりしていました。夏の暑い時期はものすごく気持ちよかったです。今はそんなことをしたら、センサーがビーンと鳴って怒られてしまいますが。

私の一番好きな場所と言えば、いつも白雲神社へ向かう時に蛤御門を入ると、正面に大文字山と御所が見える、あの景色です。時間によっても季節によっても見え方が違いますし、日によっても同じ景色はありません。冬、朝参式に行く時だと、空が明けていなくて薄暗い時もあります。あの場所に行くと、本当に気持ちが豊かになって潤う気がします。

それから、御苑には細道がありますが、細道に木がわーっと密集しているところも好きです。

■京都御苑の今後について、ご意見などございましたら自由におっしゃってください。

御苑には、昔はそんなにカラスがいなかったのに、一時随分と増えたことがありました。御霊神社も昔は1羽もいなかったのですが、今は何十羽も群れで住み着いています。以前は、このようなカラスを整理しはってもいいかなと思っていましたが、今はもう別段慣れてしまったのかもしれない。アオサギなども昔はいませんでしたが、この頃は歩いています。餌付けなどをしていのでしょうか。

白雲神社の前にちょうど梅林があり、その横には桃林もあって年中きれいな場所です。神社の後ろ側には紅葉もあります。本当にこういう場所に住みたいと思います。毎朝、気持ちがいいと思います。自分の庭のような場所ですが、庭の管理は環境省の管理事務所に全部やっていただけますし、こんなに良いところはありません。日本中を探してもこんな場所はないと思います。御所に行く度に気持ちが洗われて、癒されるような気がします。特に白雲さんの中は、森の中の森の中です。

私には別段こうした方が良く、あゝした方が良く、という意見はありません。最近外国からの観光客も増え、みなさん御所の良さを満喫されているようで嬉しく誇らしい気持ちが致します。

2017年5月24日 インタビュー
聞き手：田村省二、中西甚五郎

○小栗栖元徳さま プロフィール○

御霊神社の第37代宮司。また、白雲神社の宮司も兼務。